

### <研究ノート>マルセイユに眠る幕臣・横山敬

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

54

(発行年 / Year)

1985-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010995>

## 研究ノート

## マルセイユに眠る 幕臣・横山敬一

宮 永 孝

昭和五十七年初秋。

筆者は、幕府オランダ留学生の取材をおえて帰国する前、マルセイユで数日すごした。この港町に寄ったのは、横浜鎮港談判のために欧州諸国に派遣された幕府の使節——外国奉行・池田筑後守（長発）に随行して、マルセイユ上陸後、病死した外国奉行定役・横山敬一の墓を訪ねるためである。

横山に関心があったのは、かれがオランダ留学生・林研海（紀）の縁者であったことによる。横山敬一は、池田内膳の家来・横山平兵衛の長男として文政十年（一八二七）江戸で生まれた。長じて代官所の手附、次いで長崎奉行支配定役に進み、さらに外国奉行支配定役となった。

横浜鎮港の使節一行（総員三十四名）がマルセイユに到着したのは元治元年（一八六四）三月十日（洋暦四月十五日）のことである。上陸した時間は同日の昼下がりのことであるらしい。旅装を解いたのは内藤遂の『遣魯伝習生始末』によれば、「ホテル・ド・マルセイユ」とある。

マルセイユに眠る幕臣・横山敬一（宮永）

このとき組頭・田辺太一（二十二歳）の従者として随行していた三宅秀（十六歳）が書きしるした「欧行日記」〔文久航海記〕冬至書林・昭和十七年刊）に、一行が投宿したホテルについて、

「カナビール」と云ふ町の七階の「ホテル」に至る。……

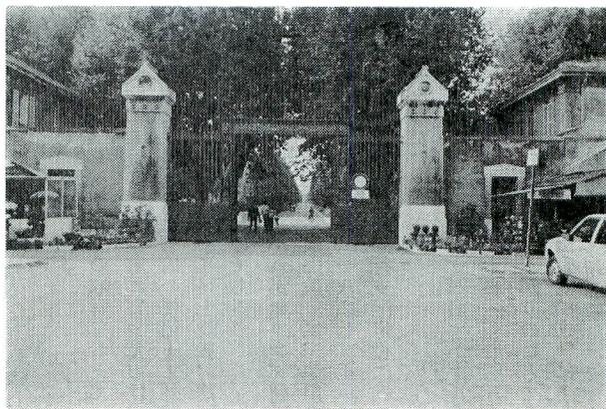
とある。

また副使・河津伊豆守（四十四歳）の従者として同行した岩松太郎（二十三歳）の「航海日記」〔遣外使節日記纂輯第三〕日本史籍協会・昭和五年刊）には、

我輩投宿の処は十字街の角にして頗る壮なる家屋なり……

とあるだけでホテル名までは記していない。

三宅秀が「カナビールと云ふ町」といっているのは、Rue Can-nabière（「カヌビエール街」）のことであろう。この通りはマルセ



サン・ビエールの墓地（正面入口）

イユの旧港 (Vieux Port) のすぐそばに位置する繁華街なのである。池田筑後守の一行が泊ったホテルについてはとくに調べてみたわけではないが、カスビエール街にある七階建のホテル——後年の Hotel du Petit-Louvre のことか。

横山敬一はインド洋を航海中、すでにかぜ気味であったようで、船が寄港する先々で医師の治療をうけ、また船内でも診療をうけ

ていたのであるが、エジプト滞在中にかかった黄熱病 (yellow fever) が命取りになったのである。これは蚊が媒介する急性伝染病であり、黄疸・高熱などを起こすものらしい。

当時、横山と同じように鎖港使節に随行した翻訳方・山内六三郎 (堤雲、二十七歳) は、明治になって『同方会誌』(五十七号) に当時の様子について一文を寄せているが、それには、

横山敬一氏は、エジプト滞在中、風土病所謂黄熱病に感染せしにや、マルセーユに着するや熱度非常に高く、一行と共に巴里に行く能はず、予は親戚の故を以て、看護滞在を命ぜられ茲に滞在一ヶ月、名医の投劑、米国老看護婦の親切なる看護も遂に其効なく、異郷に病歿せられぬ。

とある。

横山は一ヶ月以上も市内の病院で手厚い看護を受けたにもかかわらずついに不帰の客となるのだが、死去したのは元治元年(一八六四)三月二十一日(洋曆四月二十六日)の夜十一時四分頃のことであった。<sup>(3)</sup> その死について三宅秀は「航海日記」の中で、

廿二日<sup>マ</sup> 雲。横山死す。マルセイルより毎日電信機にて便あり。……

と書きしるしているし、談話筆記(「文久鎖港使節随伴記」)<sup>(4)</sup> の中にも死亡前後の様子などを伝える記述がある。

月の十五日(筆者註・元治元年三月十五日)に我一行は愈々巴里に向って出発しました。所が不幸にも同行の御書役横山敬一君が折からの病気で出発が出来ぬ。といふて病人一人を残して行くことも成らぬので、付添人として乙骨をホテルに留めて置いて、一行は巴里へと向いましたが、横山氏と我一行とは遂にこれが永き訣別となりました。

入院した横山の病状は毎日、電報でパリ滞在中の使節に伝えられた。鎖港使節のパリ到着と横山の死については、オランダに留学中の内田恒次郎(留學生の取締り)や林研海にも連絡があった。とくに林は横山と遠戚関係にあったので、使節は手紙をもつてその死を知らせたのである。そのため内田と林は、用事をかねてパリまで出向いている。

三宅秀は「文久鎖港使節随伴記」の中で、

それから巴里滞在中使節から当時和蘭に居られた林研海氏の所へ手紙を遣りましたが、先方からも用向があつたらしく、林研海氏と内田慎太郎氏(筆者註・内田恒次郎の誤まり)とが和蘭から会いに来られました。

と述べている。

元治元年三月二十二日(洋曆四月二十七日)横山危篤の報に接したパリ在住の使節らは、早速、

マルセイユに眠る幕臣、横山敬一(宮永)

奉行替……………須藤時一郎(三十二歳)  
御小人目付……………谷津勘四郎(三十一歳)  
同心……………松浪権之丞(二十八歳)  
小遣……………青木梅蔵?(年齢不詳)

ら四名を、横山の見舞いのためにマルセイユに派遣した。かれらは朝の八時半ごろ宿舎のグラント・ホテルを出ると、午前十一時ごろ列車に乗り、現地に向つた。使節代理の一行は、葬式をあげることも当然覚悟していたらしく、墓の碑文まで用意して赴いたのである。

見舞いの一行は、病床に静かに横たわっている横山の遺骸を見てがく然とし声はなかつたと思われるが、気を取りもどすと剃髪し、納棺の準備に取りかかった。葬式は洋式では行なわず、すべて使節の指示通り、日本式で行ない、棺には白布をかけ送葬した。

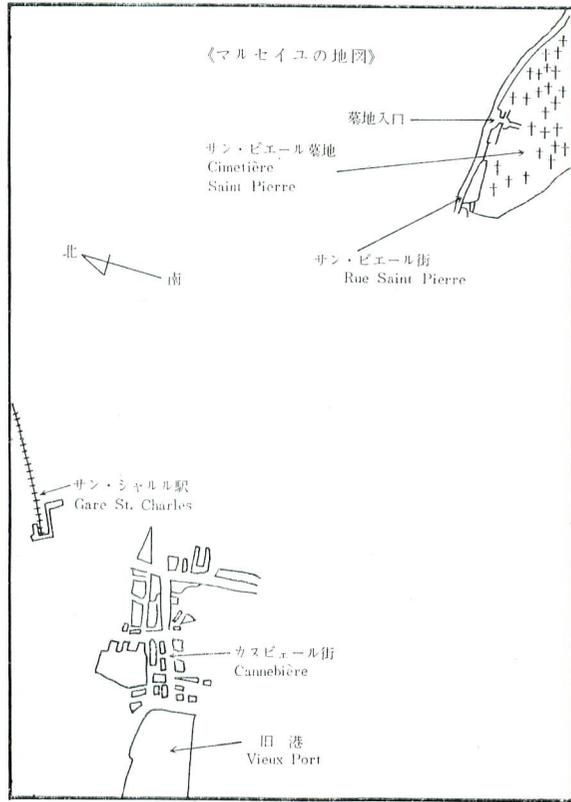
元治元年三月二十四日(洋曆四月二十九日)——遺骸は馬車に乗せられ、マルセイユ郊外サン・ピエールの墓地(Cimetière de Saint-Pierre)に運ばれ、同日の午前八時ごろ埋葬した。横山の死は現地マルセイユの市民の同情を惹いたものようであり、埋葬式には、政府高官の名代、市当局の要人ばかりか、大勢の見ず知らずの人までが立ち会い花束を手向けた。

山内六三郎はこのときの模様を次のように伝えている。

……市中の人々知るも知らぬも其の死を悲しみ、弔詞を来り述

る者多く、又葬儀にも加はり花環を送れり、予が再遊の時墓詣せしに、市人の花環を掛くるもの尚絶えず、其の厚意に感動せり。<sup>(5)</sup>

横山の墓地は、マルセイユに赴いた使節名代・須藤時一郎らが市の書記ファミンと一緒に共同墓地を三月二十三日（洋曆四月二十八日）訪れ、二千二百五十五フラン払って、墓地正面右側三区



(二坪の地)に購めたものである。

サン・ピエール墓地に入ると左側に監理事務所があるが、その斜め横の一隅に横山の墓があり、見つけやすい。筆者は横山の埋葬記録を監理事務所の職員の手をわずらわして調べてもらったが、一八六四年の「埋葬台帳」には日本人の記録は無かった。ひよっとして見落しがあつたかも知れぬが……。



横山敬一の墓（筆者撮影）

碑文は池田筑後守、撰文は田辺太一、碑名は河田相模守がそれぞれ執筆した。石碑の台石に横山の官職名と死亡年月日をフランス語で刻したということである。しかし、筆者は、墓を訪れたとき、墓石に刻まれた日本文字・フランス語を見なかったように思う。撰文は墓の背面の「銅板」に刻ったものようだし、正面の「碑文」に

## 横山信道之墓

## 筑後守池田発書

とあったものも見当らなかつた。

すでに墓を建ててから百数十年経過しており、この間に文字は

マルセイユに眠る幕臣・横山敬一（宮永）

すっかり磨滅したものであろう。ただ横山家の紋所「丸に卍」だけは今も残っている。

筆者は墓を掃除し、水と花を添えて帰途についたが、帰りざわに何気なく横山のとりの墓（二基）に視線を投じた。横山のすぐとなりは、フランス人の墓である。そのとなりのオペリスク（方尖塔）の形をした墓は、まぎれもなく日本人のものであった。たしか碑名は「前田元行」ではなかったかと思うが、ご存知の方があれば教示を得たい。

## 註

（1）内藤遂著『遺魯伝習生始末』（東洋堂・昭和十八年九月刊）の一八四ページを参照。

（2）大塚武松編『遣外使節日記纂輯第三』（日本史籍協会・昭和五年一月刊）の四〇五ページには、「申刻（午後三時から五時の間）後吾官吏及從臣等三十四名齎しく上陸す」とある。また三宅秀の「航海日記」（『文久航海記』冬至書林・昭和十七年五月刊）の一八九ページには、「十日 晴。三時マルセイユに着。……五時上陸」とある。

（3）須藤時一郎、谷津勘四郎らがバリの使節に送った三月二十四日（洋曆四月二十九日）付の書簡には、「横山敬一儀者己に去る廿一日夜十一時四分前死去いたし候由にて……」とある。同書簡は『遺魯伝習生始末』の一八八ページにひかれている。

（4）前掲『文久航海記』に収録。

（5）前掲『遺魯伝習生始末』の一八八ページと岩松太郎の

- 「航海日記」(『遣外使節日記纂輯第三』に収録)を参照。  
 (6) 「山内堤雲自伝」(『同方会誌・五七号』)を参照。  
 (7) 横山の碑名(フランス文)は、『道魯伝習生始末』によると、次のようなものである。

Tombeau de Yokoyama  
 Nobumichi  
 Officier Attache  
 à l'ambassade  
 Japonaise  
 Mort à Marseille  
 Le 26 Avril 1864

(横山信道の墓。日本使節付の武官。一八六四年四月二十六日、マルセイユで死去)

## Sommaire

par Takashi Miyanaga

Le 27 décembre 1864, Tokugawa Shogunat envoya l'ambassadeur Ikeda Chikugo-no-kami et sa suite (trente-quatre personnes au total) en France. Ils eurent pour but de négocier la fermeture du port de Yokohama. C'est le 15 avril que la délégation japonaise arriva à Marseille. Il se trouva dans la suite Keiichi Yokoyama qui fut un des attachés à l'ambassade. Il était atteint d'une fièvre jaune en Égypte quand il fut en route pour la France. Il fut envoyé à l'hôpital aussitôt qu'il

débarqua à Marseille. Il est mort malheureusement le 26 avril et a été enterré peu de jours après au cimetière de St. Pierre. Cet article est consacré à sa mort et à la visite de l'auteur lui-même au cimetière de Marseille.

### 統幕末和蘭留学関係史料集成

『幕末和蘭留学関係史料集成』(35号に紹介)の統篇として、(一)派遣関係(文書)、(二)紀行・日記(赤松大三郎和蘭滞在懐中日記など)、(三)書翰(赤松・内田・沢・津田・西・波沢・松木)、(四)雑纂(オランダへ軍艦並蒸気船購入方交渉一件ほか)、(五)伝記資料(職方履歴史料ほか)、解説(編著者)、幕末オランダ留学関係年表(宮永孝)を収める。口絵写真地図一六ページ。原稿作成に本学関係では岩壁義光・島尻克美・瀬戸義和・長尾政憲・安岡昭男の五名が協力した。

日蘭学会編 大久保利謙編著 雄松堂出版  
 昭和五十九年二月刊 定価一六、〇〇〇円